

学 会 名 第8回日本臨床作業療法学会(2022年5月15日～29日)

研究テーマ 急性期の脳卒中患者に対するCO-OPを基盤とした作業療法実践:ケースレポート

病 院 名 医療法人社団健育会 湘南慶育病院

演 者 ○吉田丈(作業療法士) 廣瀬卓哉(作業療法士) 丸山祥(作業療法士)

概 要

【はじめに】

今回、急性期の脳卒中患者に対して、Cognitive Orientation to daily Occupational Performance(以下、CO-OP)を基盤とした作業療法を実施した結果、事例の作業遂行能力やその認識に改善を認めたため、以下に報告する。尚、本報告に際して事例から同意を得ている。

【方法】

事例は、50歳代男性、右利き。病前は妻と2人暮らしで家事を分担していた。診断名は右視床出血で、左片麻痺を呈していた。CO-OPに基づいて作業観察で認めた問題点に対して、ガイド付きの発見と認知戦略「Goal-Plan-Do-Check」を通じて作業遂行能力の獲得を目指した。また、本事例は急性期であったため、CO-OPに加えて体幹機能訓練、上肢機能訓練を並行する必要があると判断し、実施した。評価指標は、COPM(①更衣②排泄)、PQRS(①上衣更衣②下衣更衣③トイレ動作)、AMPS、FIMを用いた。

【結果】

介入前後の評価結果について示す(介入前→介入後):COPM「遂行度/満足度」(①更衣「1/1」→「7/7」、②排泄「1/1」→「7/6」)PQRS(①上衣更衣4→6、②下衣更衣3→7、③トイレ動作4→7)、AMPS Motor (0.9→1.4 logits)、Process (1.1→1.6 logits)。また、本人が希望としていた更衣動作、トイレ内の動作を見守り下で実施可能となった。さらに、他の作業の際にも自分自身で戦略を立てることが可能となり、病棟でのADL自立度改善を認めた(FIM運動22認知26合計48→運動41認知35合計76)。

【考察】

本事例は、AMPSのMotorは臨床上意味のある改善(>0.6 logits)、Processは統計上の有意な改善(>0.4 logits)を認めた。また、COPMの変化は臨床上意味のある最小変化量(>2)を上回る変化を認めた。今回、急性期からCO-OPを用いることで、早期より事例自身で戦略を立てることが習慣化され、他の作業やその後の作業遂行能力の効率的な獲得に繋がっていると考えられた。したがって、急性期よりCO-OPに基づいた介入を実施することは、作業遂行能力の効率的な改善に有用である可能性が示唆された。